国語

（解答番号 1 ～ 39 ）

Ⅰ　**次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、[1]〜[22]。**

いまや計算機は圧倒的な速度で膨大なデータを処理できるようになり、人工知能は将棋や囲碁などの高度なゲームでも、人間を打ち負かすまでになった。計算による予測の網は社会の隅々にまで張りめぐらされ、もはや私たちが生きる日常の一部だ。粘土の塊を一つずつ動かしていくことが計算のすべてだった時代から、こんなにも遠くまで来たのだ。

それでも現代の科学はいまなお、生命と計算の間に[ア]巨大な距離を、埋められずにいる。人工知能の最先端の技術も、現状ではあくまで、行為する動機を外部から与えられた「自動的(**automatic**)」な機械の域を出ていない。いまのところ人間は、行為する動機をみずから生み出せるような「自律的(**autonomous**)」なシステムを構築する方法を知らないのだ。

生命の本質が「自律性」にあるとする見方はしかし、これじたい決して[イ]ではない。化学物質の配置に操られて動くバクテリアや、光に向かって反射的に飛び込んでいく夏の虫などを見ていたら、生命もまた、外界からの入力に支配された他律系だと感じられるかもしれない。実際、黎明(れいめい)期の認知科学は、生物の認知システムもまた、計算機と同様、他律的に作動するものだと仮定していたのだ。

このとき暗黙のうちに想定されていたのが、「外界からの入力——(表象による)内的な情報処理——外界への出力」というモデルである。一見すると当たり前に思えるかもしれないが、認知主体の内部と外部に世界を画然と分かつこうした発想は、認知主体を、認知主体の外部から観察するトクシュ[1]な視点に根ざしていた。

このことの限界を指摘し、生命を自律的なシステムとして見る新しい思考を切り開いていったのが、チリの生物学者ウンベルト・マトゥラーナ(一九二八—)である。

[A]、カエルがハエを認識し、それを捕食する場面を想像してみよう。このとき、カエルを外から観察する視点からすれば、カエルの外部に、カエルとは独立した「本当の世界」があるように見える。ハエは、カエルとは独立した世界に存在していて、[A]カエルはその外部にいるハエを内的に表象している。だからこそ、それを捕まえることができるのだ、と。

［B］、今度はカエルの視点に立ってみると、本当の世界などどこにもないことに気づく。カエルが経験できるのは、どこまでもカエルの世界でしかない。カエルの立場からすれば、入力も出力もないのだ。

認知主体の外から、認知主体を見晴らす観察者の視点に立つとき、「入力──情報処理──出力」という他律的なモデルが妥当に思えるが、認知主体の立場から見ると、事態はまったく異なってくるのである。

ありのままの認知現象を捉えようとするならば、まず、認知主体の外部に「本当の世界」を措定してしまう、特権的な観察者の立場を捨てなければならない。マトゥラーナは、共同研究者フランシスコ・ヴァレラ（一九四六─二〇〇一）との共著『オートポイエーシスと認知』(*Autopoiesis and Cognition*.1980)の序文のなかで、このことに気づき、生物学に対するスタンスを変えることになったケイイ[2]を打ち明けている。

マトゥラーナはもともと、カエルやハトなどを対象として、生物の色知覚に関する研究をしていた。このとき彼は、物理的な刺激と、これに応答する神経系の活動の間に、素直な対応があると想定していた。［C］、客観的な色彩世界を、生物は神経細胞の活動によって「表象」していると考えていたのだ。とすれば、やるべき仕事は、外界の色に対応する神経細胞の活動パターンを見つけ出すことにあるはずだった。

ところが、研究はほどなく壁にぶち当たった。外界からの刺激と、ハトの神経系の活動パターンの間に、素直な対応が見つからなかったのだ。同じ波長の光の刺激に対して、異なる神経活動のパターンが観測されることがしばしばあった。ハトの神経活動を調べている限り、客観的な色彩世界の存在を［ウ］するものはどこにもなかったのである。

［D］彼は、発想をダイタン[3]に変えてみることにした。ハトの網膜と神経系は、ハトと独立にある外界を再現しようとしているのではなく、むしろハトにとっての色世界を生成するシステムなのではないか。ここから彼は、研究へのアプローチを［エ］変える。

生物の神経系は、外界を内的に描写しているのではなく、外的な刺激をきっかけとしながら、あくまで［Ⅰ］。生物そのものもまた、外界からの刺激に支配された他律系ではなく、みずからの活動のパターンに規制された、自律的なシステムとして

理解されるべきなのではないか。こうした着想を［　オ　］に、彼はその後、新しい生物学の領域を切り開いていく。

では、生命そのもののような自律性を持つシステムを、人工的に作り出すことは可能なのだろうか。これは人工生命を追求する科学者が、まさにいまも全力で取り組んでいる問いだが、まだ誰も答えは知らない。自律的な生命と、自動的な計算の間には、依然として大きな溝が広がっているのだ。

この間隙を性急に埋めようとするとき、生命を計算に近づけようとする結果にもなりかねない。極端な話、私たち自身が外から与えられた規則を遵守するだけの自動的な機械になってしまえば、計算と生命の溝は埋まる。スマホに流れてくる情報に反射しながら、ゆっくりと息つくまもなくせっせとデータをコンピュータに4キョウキュウし続ける私たちは、計算を生命に近づけようとしているより、みずからを機械に近づけようとしているようにも見える。だが、これでは明らかに［　カ　］である。

(注1)ドレイファスはすでに半世紀前に、計算機が人間に近づいていくより、むしろ、人間が計算機に近づいていく未来の危険性を説いた。人間を超える知能を持つ機械の出現ではなく、人間の知性が機械のようにしか作動しなくなることをこそ恐れるべきだと語ったのだ。

5カンジンなことは、B計算と生命を対立させ、その間隙を埋めようとすることではない。これまでも、そしてこれからもますます計算と雑(まざ)り合いながら拡張していく人間の認識の可能性を、何に向け、どのように育んでいくかが問われているのだ。

(注2)モンティ・パイソンのC「哲学者サッカー」(*The Philosophers' Football Match*)というスケッチ・コメディーがある。これは、古代ギリシアとドイツの哲学者たちが、サッカーで対決するというシュールな喜劇だ。古代ギリシアチームには、ソクラテスやプラトン、アリストテレスやアルキメデスら、錚々(そうそう)たるメンバーがいる。ドイツチームもまた、カント、ヘーゲル、ハイデガー、マルクスなど、豪華な布陣である。

最初に審判の孔子(こうし)が試合開始の笛を鳴らす。ところが、哲学者たちは一向にボールを蹴ろうとしない。「はたしてボールは実在するのか」「そもそもサッカーとは何であるか」など、それぞれの哲学的な思索に忙しい様子だ。

そのまま前半戦が何も起きないまま終わる。ようやく、後半戦終了間際になって、アルキメデスが「ユリイカ(わかったぞ)!」

と叫び、ついにボールを蹴る。そこからギリシアチームが猛烈に攻め込み、アルキメデスがサイドからクロスボールを上げると、ソクラテスがヘディングで鮮やかにシュートを決める。マルクスがオフサイドを主張するが、審判の孔子は取り合おうとしない。結局、試合はギリシアチームの勝利に終わる。

現代の認知科学者は、生物の認知を特徴づける重要な性質として、身体性(Embodiment)や状況性(Situatedness)、脳内だけでなく環境の情報を生かして判断や行為を生成していく拡張性(Extendedness)などを指摘している。スポーツ選手に求められるのは、まさにこうした［Ⅱ］だ。一度開始の笛が鳴れば、試合は待ったなしで進行していく。選手にとって大切なことは、試合を描写することでも理解することでもなく、進行し続ける試合の流れに参加することである。

ところが哲学者たちは、試合の進行から切り離されたまま、状況と[6]ムエンな思考に耽(ふけ)り、しかも結論が出るまで動こうとしない。

目の前の状況に流されないことは、抽象的な思考をくり広げるためには必要なことかもしれない。ゲームの前提そのものにまで立ち返り、仮説を問い直す思考こそ、しばしば新たな世界を開拓してきた。だが、少なくともサッカー場においては、状況を踏まえない知性は滑稽でしかない。

状況に即座に対応すべき場面で思索に耽る――そんな哲学者たちの姿を「哲学者サッカー」はコミカルに描き出す。が、私たちはこれを、喜劇として笑い飛ばすことができるだろうか。地球温暖化について、生物多様性の喪失について、私たちが直面している様々な危機について、世界中の科学者たちがいまも膨大なデータを解析し、未来のシミュレーションをしている。人類を総体として見れば、地球環境について懸命にデータを集め、膨大な計算をしていると言えよう。

(森田真生『計算する生命』より)

(注1) ドレイファス――アメリカ合衆国の哲学者(一九二九～二〇一七)。
(注2) モンティ・パイソン――イギリスのコメディ・グループ。

問1 ――線1～6を漢字で書いたときに用いる字として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、1 [1] 2 [2] 3 [3] 4 [4] 5 [5] 6 [6]。

1 トクシュ　①朱　②趣　③首　④酒　⑤腫　⑥殊
2 ケイイ　①移　②緯　③維　④偉　⑤畏　⑥尉
3 ダイタン　①単　②淡　③担　④胆　⑤探　⑥綻
4 キョウキュウ　①教　②京　③供　④競　⑤享　⑥狭
5 カンジン　①肝　②巻　③勘　④館　⑤刊　⑥勧
6 ムエン　①遠　②沿　③延　④縁　⑤援　⑥艶

問2 [ア]～[カ]に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア [7] イ [8] ウ [9] エ [10] オ [11] カ [12]。

ア　①裏付ける　②横切る　③横たわる　④横になる　⑤横取る
イ　①軽薄　②誠実　③明快　④自動　⑤自明
ウ　①示唆　②依拠　③補完　④懐柔　⑤抗弁
エ　①すらりと　②がらりと　③からりと　④ずっしりと　⑤がらんと
オ　①起点　②欠点　③観点　④視点　⑤素点
カ　①我田引水　②意気消沈　③無知蒙昧（むちもうまい）　④波瀾万丈（はらんばんじょう）　⑤本末転倒

問3　[A]～[D]に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。
解答番号は、A [13]　B [14]　C [15]　D [16]。

① あるいは　② つまり　③ ところが　④ たとえば　⑤ そこで

問4　――線A「カエルはその外部にいるハエを内的に表象している」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、[17]。

① カエルは、自律的に行為の動機を生み出すことで、ハエを捕食することができているということ。
② カエルは、ハエがカエルの外部に存在しており、独立していることを理解しているということ。
③ カエルが知覚できる世界はあくまでカエルの世界であり、ハエもその一部であるということ。
④ カエルが、外界にいるハエの存在を心の内に描くことで、ハエの存在を知覚しているということ。
⑤ カエルは、ハエという独立した存在を通すことで、初めて外的な世界に接しているということ。

問5　[I]に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、[18]。

① 内界と外界の境界を自ら決定している
② 自己自身に反復的に応答し続けている
③ 内的に描写した外界を支配し続けている
④ 認知システムの作動を反復し続けている
⑤ 認知主体による出力に依存し続けている

問6　——線B「計算と生命を対立させ、その間隙を埋めようとすること」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、19。

① 生命の自律的なシステムが計算機よりも高度な存在であることを明らかにし、計算機の性能を高めて生命に近づけるために力を尽くすこと。

② 生命の持つ自律的なシステムと自動的な計算の性質を全く別個のものと考え、どちらかの能力を犠牲にしてもう片方に近づけようとすること。

③ 自律的な生命と自動的な計算を競わせることでその能力を検証し、より優れていると判断した方にもう片方を同一化させようとすること。

④ 現代社会では人間の行動が機械化しつつあることに警鐘を鳴らし、自動的に計算を行う機械を人間の生活からできる限り排除していくこと。

⑤ 機械の能力が進歩し続けていく社会で、機械の計算能力を活用しながら人間の自律的な能力の可能性を拡張していくために努力すること。

問7 ――線C「『哲学者サッカー』」とあるが、筆者がこの例を通して述べたいことは何だと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、20。

① サッカーには知性が必要であると言われているが、知性だけではサッカーをすることはできないということ。
② 誰かが行動を起こすまで決して動かず、周囲の様子を見ようとする慎重さが現代人の特性であるということ。
③ 人類は、直面している危機に対して情報を集めたり分析したりするだけで、行動を起こしていないということ。
④ 哲学者は抽象的な思考をすることには長けているが、危機に直面した時に行動を起こすことはできないということ。
⑤ 人類が直面している様々な危機に立ち向かっていくためには、知性は不要であり即座に対応するべきだということ。

問8 Ⅱ に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、21。

① 外界からの刺激
② 哲学的な動機
③ 能動的なプレー
④ 生命らしい知性
⑤ 価値のある思考

問9　本文の内容と合致するものを、次の ① 〜 ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 22 。

① 行為の動機を自身で設定して行動する「自律性」をもったシステムを人間が完成させることは不可能であり、現代社会ではむしろ人間が機械に近づいている。

② マトゥラーナは、生物の色知覚に関する研究を進めていくなかで、ハトが外界からの刺激を網膜と神経系によって把握する過程における神経系の活動パターンを解き明かした。

③ 認知科学という分野の学問が始まったころの研究者たちは、生物の行動が計算機と同じように外部からの入力によって出力されるものであると認識していた。

④ 計算機と生命の最大の相違点は、行為の動機を生み出す「自律性」の有無であり、それを確認するためには認知主体に対する特権的な観察者の視点が不可欠である。

⑤ 生命と同じような自律性を持つシステムを人工的に開発することで、人類が直面している地球温暖化などの環境問題を根本的に解決することが期待できる。

Ⅱ　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、 23 ～ 39 。

昔、中納言和田麿と聞こゆる人おはしけり。その末に余吾大夫といふ兵者ありけり。ア年ごろ、(注1)三輪の市のかたはらに城を造りて、いよそほひいかめしうして、住みけるほどに、妻の敵に攻められて、城も破れ、兵もことごとくうち失はれにけり。からうして命ばかり生きて、(注2)初瀬山の奥に籠もりてけり。

敵、ろあさり求めけれども、深く用意して、(注3)笠置といふ山寺の、(注4)岩屋のありける中に隠れて、二三日住みけるほどに、岩のもとに、(注5)寺蜘蛛といふもの、網をかけたりけるに、大きなる蜂のかかりたりけるに、網をくりかけて、巻き殺さむとしける時に、あはれみをおこして、取り放ちて、蜂にいひけるやう、「生あるものは、命に過ぎたるものなし。(注6)前世の戒力少なくて、畜生と生まれたれども、心あれば命を惜しむこと、人に変はらず。恩を重くすること、同じかるべし。われ、敵に攻められて、からきめをみる。身をつみて、A汝が命を助けむ。必ず思ひ知れ」とて放ちやりつ。

その夜の夢に、柿の(注7)水干袴a着たる男の来たりていふやう、「昼の仰せ、ことごとく耳にとまりて侍る。御志、まことにかたじけなし。われ、つたなき身を受けたりといへども、いかでか、その恩を報ひ奉らざらむ。願はくは、わが申さむままにイかまへ給へ。B君の敵、亡ぼさむ」といふ。

「たれ人のかくはのたまふぞ」といへば、「昼の蜘蛛の網にからまれつる蜂は、おのれにb侍る」といふ。ウあやしながら、「いかにしてか、敵をばうつべき。我に従ひたりし者、十が九は亡び失せぬ。城もなし、かかりもなし。すべて立ち合ふべきかたもなし」といへば、「などかくはのたまふぞ。残りたる者も侍るらむ。二三十人ばかり、かまへてかたらひ集め給へ。この後ろの山に、蜂の巣四五十ばかりあり。これもみな、わが同じ心のものなり。かたらひ集めて、力を加へ奉らむに、などかうち得給はざらむ。ただし、その軍し給はむ日は、はな寄せ給ひそ。もとの城のほどに、仮屋を造りて、(注8)なりびさこ、壺、瓶子、かやうの物を多く置き給へ。やうやうまかり集はむずれば、そこに隠れc居らむためなり。しかしか、その日よからむ」と契りて、dいぬと思ふ

ほどに、夢覚めぬ。

浮けることと思へど、いみじくあはれにおぼえて、夜に隠れて、ふるさとへ出でて、ここかしこに隠れ居るものどもをかたらひていはく、「われ生けりとてかひなし。最後に一矢射て、死なばやと思ふ。弓矢の道はさこそあれ。男ども」などいひければ、「まことにしかるべきこと」とて、五十人ばかり出でにけり。仮屋造りて、ありし夢のままにしつらひをれば、「これは何のためぞ」とあやしみければ、「さるべきゆゑあり」とて、めでたくしつらひおきつ。

その朝に、ほのぼのと明けはなるるほどより、山の奥の方より、大きなる蜂、一二百、二三百、うち群れて、いくらともなく入り集まるさま、いとけむつかしく見えけり。

日さし出づるほどに、敵のもとへ、「これに侍り。申すべきことあり」といへりければ、敵よろこびて、「尋ね失ひて、[ア]おぼえつるに、いみじき幸なり」とて、三百騎ばかりうち出でたり。勢ひをくらぶるに、物の数にもあらねば、侮りて、いつしか駆け組むほどに、蜂ども仮屋より雲霞のごとく涌き出で、敵の人ごとに、二三十、四五十、取りつかぬはなし。目鼻ともなく、はたらく所ごとに、刺し損じけるほどに、物もおぼえず。打ち殺せども、五六こそ死ぬれ、いかにも、いかにもする力なくて、弓矢の行く方も知らず、まづ顔をふさぎさわぎけるほどに、思ふさまにはせめぐりて、敵三百余騎、時のほどに、たやすくうち殺してければ、おそれなく、もとのあとに返りゐにけり。

死にたる蜂、少々ありければ、笠置の後ろの山に埋みて、堂を建てなどして、年ごとに蜂の忌日とて、恩を報じけり。

末には、はかばかしき子孫もなかりければ、この寺をば敵の孫にあたりける法師の、祖父の敵なりける蜂の行く方なりとて、焼き失ひければ、[イ](注9)をこの者なりとて、奈良より放たれにけり。

（『十訓抄』より）

（注1）三輪の市——現在の奈良県桜井市の地名。
（注2）初瀬山——現在の奈良県桜井市初瀬付近の山。

（注3）笠置――現在の京都府相楽（そうらく）郡の地名。
（注4）岩屋――岩穴。
（注5）寺蜘蛛――女郎蜘蛛。蜘蛛の一種。
（注6）前世の戒力――前世で修行して、戒律を守ることによって得られる不思議な力。
（注7）柿の水干袴――水干（庶民の服装）とあわせて着用する、低い身分の者の服の色とされる柿色の袴。
（注8）なりびさこ、壺、瓶子――「なりびさこ」はひょうたん、「瓶子」は酒を入れる器のこと。
（注9）をこの者――馬鹿者。

問1 〰〰線ア～オの本文における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 23 イ 24 ウ 25 エ 26 オ 27 。

ア 「年ごろ」
① 年月が過ぎたころ
② 一人前の年齢になった時
③ 長い年月の間
④ ちょうどその時
⑤ 年老いたころ

イ 「かまへ」
① 待ち構えて
② かかわって
③ 組み立てて
④ 相手をして
⑤ 用意して

ウ 「あやしながら」
① 不都合だと思いながら
② 不思議に思いながら
③ 見苦しいと思いながら
④ みっともないと思いながら
⑤ つらいと思いながら

エ 「あはれに」
① 心打たれて
② かわいく
③ 気の毒に
④ つまらなく
⑤ 寂しく

オ 「はかばかしき」
① 思い通りに行かない
② 頼りにならない
③ たいしたことのない
④ しっかりとした
⑤ はっきりとした

問2 ‖線い～はの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。
解答番号は、い **28** ろ **29** は **30** 。

い「よそほひいかめしうして」

① 服装を立派にして
② 城の防備を厳重にして
③ 城の装飾を豪華にして
④ 城のたたずまいに威厳があって
⑤ 装束が荒々しくて

ろ「あさり求めけれども」

① その行方をあちこち捜し回ったけれども
② 食べ物を捜し求めたけれども
③ 姿が見えないので焦って捜したけれども
④ 大声で威嚇しながら捜したけれども
⑤ すぐに見つかると思って捜したけれども

は「な寄せ給ひそ」

① 攻め寄せ申し上げるべきではありません
② 攻め寄せてよいでしょうか
③ 攻め寄せてもらいたいぐらいです
④ 攻め寄せなさいませ
⑤ 攻め寄せなさってはいけません

問3 ——線A「汝が命を助けむ」とあるが、このように思ったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 31 。

① 蜂として生まれたのは前世の行いによるものであり、何の罪もない者が殺されそうなことが痛ましく思えたから。
② 蜂であっても人の気持ちが分かるため、それを助けることで自分にも何か恩恵があるのではないかと思ったから。
③ 敵に攻め込まれて命の危機にある自らの状況を案じて、気を紛らわせるために蜂を助けてやろうと思ったから。
④ 今にも殺されそうな蜂が、敵に攻め込まれ危険な状況である自分の境遇と重なり、助けてやろうと思ったから。
⑤ 蜂の命を助けることが現世で徳を積んだということになり、たとえ死んでも来世は幸せになれると思ったから。

問4 〰〰線a～fの動詞を活用の種類で分類したときの組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 32 。

① 〔a・d〕〔b・c〕〔e・f〕
② 〔a・b〕〔c〕〔d・e・f〕
③ 〔a・e〕〔b・c〕〔d・f〕
④ 〔a・c〕〔b・d・e〕〔f〕
⑤ 〔a・c・e〕〔b・f〕〔d〕

問5 ━━線B「君の敵、亡ぼさむ」とあるが、男がこのように言ったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、33。

① 男の正体は昼間に蜘蛛の巣に引っかかっていた蜂であり、余吾大夫に助けられた恩を返したいと思ったから。
② 男は、余吾大夫が蜂を助けたという話を聞き、その善行に報いて敵を倒すために協力したいと思ったから。
③ 昼間に余吾大夫に助けられた蜂が、このままではまた蜘蛛に捕らえられると思い、対策を講じたいと思ったから。
④ 余吾大夫に助けられた蜂が、その正体である人間の姿で現れて、味方として敵を倒したいと思ったから。
⑤ 男は、蜂を助けた余吾大夫の心意気に感動し、彼の命を生き永らえさせなければもったいないと思ったから。

問6 ━━線C「ありし夢のままにしつらひをれば」とあるが、具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、34。

① 四、五十の蜂の巣を集めて、もとの城の付近に作った仮小屋の中に設置した。
② もとの城の付近に作った仮小屋の中を、蜂が集まってきやすいような間取りにした。
③ 残っている二、三十人の兵士たちを集めて、もとの城の付近に仮小屋を作った。
④ 夢の中に出てきた男が集めた仲間を、もとの城の付近に作った仮小屋に住まわせた。
⑤ もとの城の付近に仮小屋を作って、ひょうたんなどの容器をたくさん置いた。

問7 ア・イに入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 35 イ 36。

ア ① 心やすく ② 疎からず ③ 安からず ④ にくからず ⑤ うしろやすく

イ ① うるはしき ② いみじき ③ しかるべき ④ やむごとなき ⑤ かたじけなき

問8 ——線D「物もおぼえず」とあるが、敵の兵たちがこのようになってしまったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、**37**。

① ものすごい数の蜂たちが飛び出してきたものの、兵を刺すことには失敗したから。
② 数多くの蜂たちが飛び出してきて、顔を所構わず刺されてしまい傷ついたから。
③ 大量の蜂たちが飛び出したことで、味方がどこにいるか分からなくなったから。
④ 敵の前を蜂が飛び回ったため、どこを攻撃したらよいか分からなくなったから。
⑤ 組み打ちの最中に蜂が邪魔をしたために、敵味方の区別がつかなくなったから。

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、**38**。

① 余吾大夫は、敵に攻められて命の危機にある現状を、前世で積んだ戒力が足りなかったからだと思っていた。
② 生き延びて隠れていた兵たちを集めた余吾大夫は、蜂が味方になってくれることで勝ち目があることを説明した。
③ 余吾大夫の軍は、敵のいる場所の近くに仮小屋を作ったことで、不審に思った敵を呼び寄せることができた。
④ 蜂たちが取りついた敵兵たちは慌てふためき、余吾大夫たちはその隙をついて簡単に敵を討つことができた。
⑤ 戦で犠牲になってしまった兵たちを弔い、堂を作って祭っていたが、敵の孫にあたる法師に焼き払われてしまった。

問10 『十訓抄』と同じく、鎌倉時代に成立した説話集を、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は、 **39** 。

① 日本霊異記
② 今昔物語集
③ 古今著聞集
④ 方丈記
⑤ 打聞集